

# きょうだい関係における葛藤の解消と自己評価維持

## Conflict Resolution and Self-evaluation Maintenance in Sibling Relationships

磯崎三喜年 ISOZAKI, Mikitoshi

● 国際基督教大学  
International Christian University

 **Keywords** きょうだい関係, きょうだいの軋轢, 葛藤の解消, 自己評価維持  
Sibling Relationships, Sibling Friction, Conflict Resolution,  
Self-evaluation Maintenance

### ABSTRACT

A self-evaluation maintenance model has many implications for sibling relationships. The purpose of this paper is to examine sibling friction and conflict resolution in terms of the self-evaluation maintenance mechanism. Consistent with this psychological mechanism, the respondents reported that there was sibling friction when the siblings believed that one of them was better than the other(s) on relatively important dimensions. To reduce a threat to self-evaluation and to resolve sibling conflicts, the respondents reported that the siblings used a strategy of change in relevance. A strategy of change in closeness was also used. It was discussed that the self-evaluation maintenance mechanism played an important role in the influencing how siblings maintain sibling relationships.

## はじめに

きょうだい関係は、親密な対人関係のひとつであり、その他の対人関係の基礎をなすものでもある。また、きょうだい関係は、縦の関係ともいうべき親子関係と、横の関係ともいうべき友人関係の中間にあって、前者から後者への橋渡しの役割をなし、子どもの社会的適応にとって重要な意義を持っている(塩田・大橋, 1958)。

きょうだいは、遺伝・環境要因のいずれにおいても基本的に類似している。物理的な近接性も高く相互に接触する機会も多い。このように、きょうだい関係は、さまざまな対人関係の中でも特に結びつきが強いものといえる。きょうだい相互の意識や行動に大きな影響を与えるゆえんである。

対人関係に関する理論には、Heider (1958) のユニット(単位)関係とセンチメント(感情)関係の概念に基づくバランス理論がある。きょうだい関係は、典型的なユニット関係にあり、親密さや親愛の情も生起しやすい。対人関係の希薄化が指摘される現在においても、きょうだい関係は、通常ある年齢段階に至るまでは、より頻繁な接触がなされることが多く、行動的・感情的関わりも強い。もちろん、接触の頻度や影響の受け方は、きょうだい間の年齢差や、きょうだい構成などによって異なると思われる。

より頻繁な接触と行動的・感情的関わりが強いだけに、きょうだい関係は、親密で親愛の情だけでなく、嫉妬や反発、葛藤や軋轢を生み出すものとなる。

塩田・大橋(1958)は、長子にとって、次子の誕生は、それまで独占してきた親の愛情を奪う不都合な存在でもあり同時に、自分より劣る次子は、可愛い下位者でもありとし、長子の次子に対する感情は愛と憎の両方を含んだアンビバレントなものとなると指摘している。また、次子にとっても、長子は、ときには自分の世話をしてくれることもあるがときには自分の要求を阻む存在でもあり、この気まぐれな長子との適応という問題に、次子は最初からさらされるという。

さらに、第三子の誕生は事態をより複雑にする。

第三子は、長子にとっては、自分から親の愛を奪った次子からそれを奪い取る愉快な存在である。また次子はいまや腹背に敵をもつことになる(塩田・大橋, 1958)。

このように、きょうだい関係は、相互にアンビバレントな感情を抱きやすく、葛藤や軋轢を生み出すものでもある。また、きょうだい相互の志向性や欲求は概して類似しがちであるが、その場合、自ずときょうだい間の競争的な色彩は強まると思われる。そして、そこで生じる葛藤や軋轢のある部分は、ある年齢段階になると次第に解消されていくようにも思われる。それは、なぜか。また、それはどのような形でなされるのだろうか。

この問題は、きょうだい関係をとおして、自分自身をどう捉え、どう調整を図っていくかという問題でもある。そのことが、社会的な適応へとつながることになる。

きょうだい間で自己をどう捉え、調整や働きかけを行うかは、きょうだいのいずれかによって一方的になされるといふより、きょうだい相互によって、またそのときどきの状況に応じてなされていくと考えられる。それは、きょうだい関係において、自己ときょうだいを相互にどう生かすかという問題でもある。

本研究は、きょうだい間の親密さだけでなく葛藤や軋轢の問題を自己評価維持(self-evaluation maintenance: SEM)モデル(Tesser, 1984, 1988)の視点から検討する。また、きょうだいが互いの関係を維持する上で、そうした葛藤や軋轢に対してどのような対処法をとろうとするか、またその効果や現在のきょうだい関係についても検討を行うことにする。

SEMモデルでは、心理的に近い他者の優れた達成によって自己評価が上昇する反映過程と、逆に自己評価が低下する比較過程が仮定されている。きょうだいの優れた達成を喜び、気分がよくなるのは反映過程に当たる。しかし、きょうだいで志向する方向が同じ場合、きょうだいの優れた達成は、もう一方のきょうだいの自己評価を低下させてしまいがちである。これが比較過程である。このいずれの過程が生起するかは、当該遂行領域が自己を規定する度

合い（関与度）による。自己にとって関与度が低いときは反映過程が、関与度が高いときには比較過程が生起しやすい。

自己評価の低下は不快であり、人は自己評価維持のため、関与度、きょうだいとの心理的な近さ、達成度を変えることによって、比較過程の生起を避け、反映過程を求めようとする。これが自己評価維持機制である（磯崎、1998 参照）。

自己評価維持の視点から、きょうだい関係を調べた研究に Tesser (1980) がある。Tesser は、きょうだい間の心理的な近さをきょうだい間の軋轢（どのぐらい軋轢を感じたか、口論や喧嘩をしたかなど）の観点から取り上げている。そして、以前行われた大学生を対象とした調査結果を再分析した結果、自己にとって関与度（重要度）が高いことから（人気度や技能など）において、きょうだいの方が優れ、きょうだい間の年齢が近い場合に軋轢が大ききことが明らかとなった。

また、Tesser (1980) は、自己規定に関わる関与度を、きょうだいとの遂行次元における同一視の程度（能力や社会的状況における行動の仕方がきょうだいでどれぐらい似ているか、考え方や感じ方そして興味などがきょうだいでどれぐらい似ているか）の観点から取り上げている。男子では、人気、技能などの点で、回答者よりきょうだいが上回り、かつきょうだいとの年齢が近いと、同一視の程度が小さくなった。回答者の方がきょうだいより優れている場合、逆に同一視は大きくなった。ただし、同一視の程度に関するこうした結果は、女子では見られていない。

さらに、Tesser (1980) は、科学者とその父および兄弟との関係について検討した。科学者とその父、兄弟の仕事の類似性およびその関係の良好性を評定し、科学者の遂行が高いとき、科学者とその父や兄弟の類似性と関係の良好性には負の相関が見られた。これは、SEM モデルの予測に合致している。

つまり、自己評価を維持できるかどうかによって、きょうだい間の関係が左右されることがうかがえる。

ただし、きょうだい間の年齢や、兄弟と姉妹とで結果が異なることも示されている。

さらに、Beach & Tesser (1995) の拡張 SEM モデルに示されるように、きょうだいの一方の自己評価が維持されても、もう一方の自己評価が維持されなければ、きょうだい間の関係は不安定なものとなるように思われる。

その意味で、きょうだい関係は、一方が自己評価維持するだけでなく、きょうだいの双方にとって自己評価が維持されるような形になることが望まれる。つまり、自分ときょうだいのおかれた状況を踏まえながら、相互の自己評価維持が可能な形で変化していくことによって、より安定した関係が期待できる。

以上のような点を踏まえ、ここでは大学生を対象に検討を行うことにする。

## 方法

きょうだいのいる大学生 129 名（男子 33 名、女子 96 名）を対象とした。対象となった学生は、自己評価維持の考え方をある程度理解しており、彼らは、自己評価維持の考え方を参考にして、現在および過去のきょうだい関係について考えたこと、感じたことを自由に記述するよう求められた。

## 結果と考察

### 1. きょうだい構成

2 人きょうだい（兄弟・姉妹・兄妹・姉弟）が全体の 77 %、3 人きょうだいが 20 %、4 人きょうだいが、5 人きょうだいがそれぞれ 1.5 %であった。

### 2. きょうだい間で、葛藤や軋轢がない場合

以下にいくつかの事例を示す。自由記述のため、きょうだい間の年齢差が示されていないものもある。

#### 事例

- (1) 姉（本人）と弟（3 歳下） 弟はスポーツが得意（サッカー）で勉強は不得意。姉は勉強好きだが、スポーツはそれほど得意ではない。
- (2) 兄（3 歳上）と妹（本人） 能力、性格いずれも対照的。運動得意で手先器用、勉強不得手な兄。

勉強が比較的でき、運動苦手で不器用な妹。兄は、勉強ができなくても友達が多く、「優しい性格」と両親から評価され、妹は学習面と努力する姿勢が評価された。

- (3) 姉 (6 歳上), 兄 (5 歳上), 弟 (本人) 兄は勉強はできなかったが、サッカーがうまい。弟は勉強に力を入れた。サッカーがうまい兄を自慢げに話す母を見て弟は自分は「勉強」と思った (なお、姉との間の言及はない)
- (4) 姉 (本人) と弟 (3 歳下) 姉弟は、はじめから持っている特性が違うため、互いを認めあう形でうまくいっている。
- (5) 姉 (本人) と弟 きょうだいで視点 (志向性) が違い、葛藤はほとんどなかった。
- (6) 姉 (本人) と妹 (2 歳下) すべてではないが正反対の部分がある。姉妹という近い関係にあり、長所・短所をよく知っているため、無意識的に相手よりも自分が勝っている長所を伸ばそうとした結果かもしれない。
- (7) 兄 (3 歳上) と妹 (本人) 小さい頃、兄が三輪車、妹がローラースケートなど、互いに別のものので自己評価を保っていた。
- (8) 姉 (本人) と弟 (2 歳下) 勉強では姉、スポーツでは弟と、共に認めあっていた。
- (9) 兄 (7 歳上) と弟 (本人) で、年が離れているためあまり自己評価を気にすることがなかった。勉強は弟ができたが、弟の不得意分野が兄の得意分野だったことによりうまくできていた。

ここに挙げられた事例は、必ずしも自己評価の維持を志向したものというわけではない。むしろ、きょうだい間で、興味や得意分野などが違っていたため、結果として、きょうだいの自己評価がうまく保たれていた可能性がある。その意味で、きょうだい間がうまくいっている。特に (9) の事例は、無意識的なものであるにせよ、きょうだい相互に自己評価が維持されている典型的な事例といえる。

また、このようにきょうだい間で自己評価が保たれているのは、概して、きょうだい間の性が異なっていたり (事例 (1) (2), (4) (5), (7) (8)), 同性きよ

うだいでも年齢が離れている (事例 (3) の 5 歳差, 事例 (9) の 7 歳差など) 例が多い。ただし、事例 (6) のように、同性で年齢が近くても葛藤がない例もある。

### 3. きょうだい間でライバル心、葛藤や軋轢を感じている場合

全体の 37 %が、きょうだいに対してライバル心を抱いたり、葛藤や軋轢を感じていたと回答していた。

#### 事例

- (1) 兄 (3 歳上) と妹 (本人) とで、きょうだい間にライバル意識あり。妹のライバル心は、兄が高い評価を得たときではなく、兄が自分を見下す時に生じていた。妹にとって、年上の兄が高い評価を得るのはむしろ誇らしいこと。これに対し、兄は、妹が高い評価を得たときにライバル心を持っていたようだ。
- (2) 妹が常に、姉 (本人) のまねをしたがった。クラシック・ピアノからジャズ・ピアノ、そしてギターへ。姉はそのたびに自分のやることを変えてきた。姉は、最後には、楽器を弾くのをやめてしまった。妹は、音楽全般が得意だった。
- (3) 妹 (2 歳下) と一緒にバイオリンをやっていた姉 (本人)。ずっとライバル意識があった。
- (4) 兄と妹 (本人) で、多くのことに興味を持ち成績がよい兄と比較されるのが辛いと妹 (本人) は感じている。
- (5) 姉 (本人) として、妹と比較されるのはたいへん苦痛。
- (6) 一卵性双生児の姉妹。勉強ではよきライバル。妹がよくできたとき、姉 (本人) も「自分もできるはず」と奮い立った。
- (7) 姉 (本人), 妹 (3 歳下), 弟 (7 歳下) 姉 (本人) は、妹を年齢も近く同性であるためライバル視してしまう。弟に対してはライバル意識を感じない。
- (8) 姉 (本人) と 2 人の弟で、3 人が容姿、性格、学力、運動能力すべて酷似している。そのためライバル関係にあり、プライドをかけた争いが現在も続いている。

- (9) 姉（本人）と妹（2歳下） 姉妹で同じ習い事をしてきたため、よくも悪くもライバル。妹が姉と同じ中学を受験し、うまくいかなかったことで2人の関係はぎくしゃくした。その後、互いに違うフィールドで生きるようになった。
- (10) 姉（7歳上）と妹（本人） 勉強、芸術、運動能力などの点で妹が評価され、姉との仲はあまりうまくいっていなかった。姉は、「何もとりえがない」と言っていた。
- (11) 姉（本人）と妹（2歳下） 父親が姉は頭がよい、妹は顔がよいと他人に話していた。頭も顔も姉妹には重要な問題である。妹は、姉と同じ中学を受験し、不合格だったことが精神的な負担となった。妹の容姿が誉められることは姉にとって、また勉強の話題が出ることは妹にとって、苦痛であり不快であった。
- (12) 妹は姉（本人）より身長が高い。姉は、妹に身長で抜かれるのは耐えられないと思っていた。身長の高さは、自己評価に影響を与えることがらだった。
- (13) 姉（本人）と妹とで、妹が絵を描くことが得意だと認めている姉は、妹の出来具合を素直に尊重できる。しかし、自分の得意なところで妹が成功すると、不協和を感じる。幼い頃、妹に負けたくないことがらで妹が成功していると、それを素直に認めることができず邪魔してけんかになった。
- (14) 兄（6歳上）、兄（2歳上）、妹（本人） 長兄は、勉強が得意な妹のコンプレックスを刺激する存在。長兄の成功は、誇らしい気持ちもあったが、疎ましいと思う気持ちもあった。2つ上の兄は、スポーツが得意で人格者であり、妹とも仲よしだった。
- (15) 兄（2歳上）と妹（本人） 中学の頃、兄が妹に対抗意識を燃やし、互いに口をきかなくなった。たいていは兄が優れていたが、妹が身長で兄を越えたときなど、兄はとて不愉快に思っていたようだ。関係がよくなってきたのは、それぞれが自分で決めたことに挑戦し、互いが評価するようになったため。距離を置くことで互いの自己評価を保ってきた。
- (16) 姉（本人）、妹（2歳下）、妹（7歳下） 姉が習い事を始めると、2歳下の妹もすぐやりたがった。2歳下の妹が姉（本人）よりよくできると（水泳のタイムがあがるなど）、姉は他に自分がよくできるものを探そうとした。7歳下の妹とは年が離れており、妹の優れた点を自然と応援できる。
- (17) 兄（4歳上）、兄（2歳上）、妹（本人） 妹は、2歳上の兄に対しライバル意識あり
- (18) 姉（本人）と弟（2歳下） 成績など姉が上で、弟は姉に対抗心を抱く。絶対に姉と同じことをしようとせず、同じ道をたどらないようにしている。
- (19) 兄（本人）と妹（2歳下） 外向的な兄、内向的な妹。兄が英語ができることにコンプレックスを感じた妹は、勉強の話がでると閉じこもったり、口をきかない時期が1年ぐらい続いた。最近互いに成長し話もするようになった。
- (20) 姉（本人）、弟（3歳下）、妹（8歳下） 美術、運動、勉強、あらゆる面で上をいくことで自己評価を維持してきた。特に、3歳下の弟にはライバル心を燃やした。現在は、弟がスポーツに打ち込み、姉はスポーツでの自己評価はあきらめた。長女であることのプレッシャーを感じる。
- (21) 姉（本人）と弟（2歳下） 弟は姉に劣等感を持っていた。弟は、自己を卑下して低めに評価することが多かった。
- (22) 姉（7歳上）と妹（本人） 小さい頃よく姉にいじめられた。妹への嫉妬心があったようだ。
- (23) 姉、妹（本人）、弟、妹、妹の5人きょうだい 自分より下のきょうだいには負けたくないというプライドがあり、弟や妹に負けると悔しくなり機嫌が悪くなった。きょうだいが多いとライバル心が起き、きょうだいに何かよいことがあっても素直に喜べない。すべて競争という感じ。
- (24) 姉（2歳上）、妹（本人）、弟（2歳下） 優等生で立派な姉に誇りを感じつつ、苦しかった。中2のとき、高校で留学したいと積極的になった。それまで姉とはけんかばかり。姉との比較

で自己否定していた。自分を肯定的にとらえることができるようになって、姉のよい面、自分のよい面の両方が見えてきた。

(25) 姉 (4 歳上), 兄 (2 歳上), 妹 (本人) 小さい頃, ピアノのうまい姉に敵対心を感じやる気をなくした。兄とはもともと得意分野が異なり, 異性でもあり, そうしたことはない。

(1) の事例は, 年上と年下では, ライバル心に違いがあることを示している。この事例では, 兄が自己評価維持への志向が強い。また, ライバル心や軋轢を感じるのは, どちらかといえば年上のきょうだいの方が強い (上記 25 事例中 16 事例)。また, きょうだい間で, ストレスやコンプレックスを感じることもある。これは, 同性のきょうだい間 (15 事例), もしくは異性きょうだいでも年齢に近い (3 歳以下の 7 事例) 場合に生じやすい。これは先に述べた, きょうだい間で葛藤や軋轢が見られない事例 (異性きょうだい年齢の離れたきょうだい) と対照的な結果である。類似したもの同士で, 競争がより強くなるのは, Festinger (1954) の社会的比較過程理論とも合致している。

ただし, (14) のように, 年齢の離れた異性きょうだいにライバル心を感じたとする事例も見られる。

また, 3 人きょうだいの場合, 3 人とも相互にライバル心を抱いたというより, 3 人のいずれか 2 人の間でライバル心が生じやすい。そして, きょうだいの残る他の 1 人にはライバル心を起こさず, 全体としてバランスがとれるようなダイナミクスがある (事例 (7), (14), (16), (17), (24), (25) など)。5 人きょうだい (事例 23) では, こうしたダイナミクスについては触れられていない。

この他, きょうだいの方は自己評価維持がなされているが, もう一方が自己評価の維持へ向けて対抗心を燃やすという事例もある。それは, 姉 (本人) と 2 歳下の弟の事例であり, 成績などは姉の方がよい。弟は面白い絵を描くので, 姉はそちらへ行けばよいと思っているが, 弟は勉強にこだわっている様子だという。

#### 4. 自己評価を維持するための方略

ここでは, きょうだい間の葛藤に言及しているか否かに拘らず, 自己評価維持の方略としての記述がなされているかどうかについて見ていくことにする。

まず, 自己評価を維持するための方略として関与度を変えたことに言及しているのは全体の 43 % であった。

##### 事例

- (1) 兄 (本人) と弟 兄は, バasketボールに夢中でスポーツに自信を持っていた。しかし, 弟が頭角を現しチームの得点王となって注目されることにより, 屈辱を感じた兄は, バasketをやめアイスホッケーに全力を注ぐ。今は, 弟の活躍は, 兄の自慢の種。
- (2) 兄妹で, ピアノを習ったが, しだいに兄 (本人) はクラシック, 妹はジャズやポップスを弾くようになった。そして, 兄がピアノをやめたころ, 妹はクラシックをはじめた。
- (3) 姉妹ともバイオリンをやっており, 中学になって妹のほうがうまくなってきて, 姉 (本人) はバイオリンに対する関与度を下げた。代わりに勉強は姉である自分ができると感じていた。
- (4) 姉妹でバイオリンを習っていたが, 途中から姉 (本人) はチェロを習うことによって比較を避けた。
- (5) 妹がピアノが上手になってから, 姉 (本人) はピアノに触れなくなった。そして姉は得意な絵画に積極的となる。
- (6) 3 人姉妹いずれもピアノをやっていた。妹の一人が上手になると, いつの間にか姉 (本人) にとってピアノは「趣味」となり本気で取り組まなくなった。
- (7) 姉 (本人) と妹 (1 歳下) 勉強ができるのは姉, 妹は, 勉強への関与度を下げ, きょうだい間で関与度の高い分野を違うものにして棲み分けをした。
- (8) 姉 (本人) と妹 (2 歳下) で, 共に 3 歳からピアノを習い始めた。やがて, 妹はジャズ・ピアノへと方向を変えた。姉はクラシック・ピアノ。

その途端、お互い相手がよい結果を得たときに、それを素直に喜ぶことができた。

- (9) 姉（本人）と妹（3歳下）小・中学生の頃、習い事やテストの成績を比べられていた。現在は、姉妹で違う分野を勉強しており、互いに評価しあえるようになっている。

次に、きょうだいと距離を取り、心理的な近さを変えたとする回答は17%あった。

#### 事例

- (1) 兄（本人）と妹（3歳下）会話や交流があまりない。妹との交流がないのは、兄（本人）が自分の達成の低さが明らかになるのを恐れているのかも。
- (2) 姉（本人）と弟でよく絵を描いていた。弟の方が絵を描くことが好きなのに、姉がうまいと誉められたことから、弟はだんだん一緒に絵を描かなくなった。
- (3) 兄（本人）、妹、弟の3人きょうだいで、弟は兄と同様に剣道、ピアノをやっていたが、途中で全てやめてしまった。また兄と同じ高校を受験したがうまくいかなかった。弟のよそよそしさはこうしたところから来ているのでは。
- (4) 兄（本人）と妹（2歳下）妹は、勉強の話がでると閉じこもったり、口をきかないことがあった。兄から距離を置き、「自分は自分」という状況を作った。
- (5) 兄（6歳上）と妹（本人）高校・大学になり、時空間的に距離があり、それぞれ自分のよいところを見つけ確立していくことができた。

また、自らの出来具合や達成レベルを上げたとの回答は7.8%あった。

#### 事例

- (1) 一卵性双生児の姉（本人）と妹は、互いによきライバルで、妹ができるなら自分もとモチベーションを高めた。
- (2) 5人きょうだいの4番目の弟（本人）5人すべて同じ大学で、学問上の関与度も似ている。弟（本人）を含めきょうだいの上4人は心理的に近い。何とか遂行を高めようと勉学に励む。

さらに、関与度や達成レベルあるいはきょうだいとの距離を変えるなど方略を組み合わせた回答は、8.5%あった。

#### 事例

- (1) 兄（2歳上）と妹（本人）それぞれが自分で決めたことに挑戦し、距離を置くことで自己評価を保ってきた。
- (2) 姉（5歳上）と妹（本人）小中と姉の後を追うような行動を取った。しかし、高校受験が終わってから姉と逆方向に行くことで自己評価していた。6歳からのピアノだけは続け、負けたくない気持ちがあった。

いずれの事例もそれほど明確ではないものの、(1)は関与度と近さを変えた事例、(2)は関与度を変え、さらにピアノの達成レベルをあげようとしたと考えられる。

### 5. 自己評価維持と直接には関わらない場合

#### 事例

- (1) 兄（27歳）、兄（25歳）、妹（21歳）妹（本人）は、二人の兄と自分とを比較せず、あまり意識することなく過ごしてきた。（ただし、次兄は、長兄との比較に苦しんでいたようだ。そして、次第に長兄にできないことができるようになって次兄は自信を持つようになる。）
- (2) 兄と妹（本人）で、兄が優れていると自分（妹）も肯定できた。性別の違いもあり、兄と妹で物事に対する関与度も異なっていたと思われる。
- (3) 兄弟3人が3人とも私立中学を受験。しかし、3人が同じ学校を受けることはなかった。親や兄弟が、学校を変えることで接点をずらし、比較や関係の悪化を避けた。
- (4) 姉は、妹（本人）より学力が遙かに上であるが、妹はそれをうらやましいと思ったことはない。むしろ尊敬する気持ち。親の期待に押しつぶされそうに育った姉はかわいそう。
- (5) 姉と弟（本人）姉に尊敬の念を抱いていた。自己評価維持の考え方とは異なるようだ。
- (6) 姉、姉、兄（本人）、弟の4人きょうだい 全員仲良しで、特に2番目の姉と一番下の弟は親しい。ライバル意識は特になし。兄（本人）と

弟は中学まで野球。本人は高校まで続け、下の弟は違うスポーツに。下の弟が棲み分けをはかった（ただし、この部分については SEM 的な解釈も成り立つ）。下の弟が勉強のできることを自分は喜ばしく思っている。

- (7) 姉（本人）と弟（5 歳下） 親からの評価が互いの自己評価に関係。ものごころついた頃からライバル。相手の持つ自分にはない能力に対しては、反感を持ったり関係ないという感じ。

## 6. 親の働きかけときょうだい関係

日頃仲がよく、葛藤や軋轢を感じていないきょうだいでも、親の態度や働きかけによっては、きょうだい間に亀裂が生じることがある。先の 5 の (7) の事例も親の働きかけが自己評価に影響を与えている。

### 事例

- (1) 姉妹（本人）で、互いに話したり、一緒に買い物に行ったり、かなり親密な関係である。同じ習い事してきたが、姉の得意なことと妹（本人）の得意なことは違っており、興味のある対象も違う。姉が、賞状をもらってきても姉と二人だけなら自分（妹）も素直にすごいと感じた。しかし、親が姉を誉めると、そこに嫉妬を感じたり、素直に喜べないことがある。
- (2) 姉（本人）と 5 歳下の弟 かつては、勉強も運動もできる姉を弟は尊敬していた。最近、弟が勉強も運動もできはじめ、姉への尊敬心が薄れ始めている。弟が、同学年の子どもより何かできるのはうれしいが、親に弟と比較されるのはいやだ。
- (3) 姉（本人）、妹（3 歳下）、弟（6 歳下） 弟を意識しがち。父が男の子をほしがり可愛がられている。時々、自分（姉）は、いくら頑張っても評価を得られない気分になる。同じフィールドにいるわけではないが、自分でもなぜこんなに違和感があるのかわからない。逆に、妹のいいところは素直に賞賛できる。

こうした事例は、親の態度やきょうだいに対する振る舞いが、きょうだい関係に影響を与えているこ

とを示している。(1) の事例では、きょうだい相互の間では、得意分野や興味の対象が違うことによって、きょうだいのすばらしさを感じ取ることができている。しかし、親が関わると嫉妬を生起させたり、きょうだい間に微妙なずれを生じさせることになる。

逆に、きょうだい間の関係が一方的なものにならないよう、親がバランスを取るよう働きかける場合もある。

### 事例

(1) 姉（本人）と妹（3 歳下） 姉は成績もそこそこ。妹は成績が芳しくない。姉の自己評価は保たれていた。妹を両親はかばう。そのため幼い頃、姉は不満だった。親は、妹がいじけないよう意図していたようだ。

## 7. 現在のきょうだい関係について

全体の 33 %が、現在のきょうだい関係がよい関係であることに言及していた。

### 事例

- (1) 姉、姉、妹（本人） 姉 2 人をいつも意識。上の姉は勉強もでき、妹にプレッシャーを与える存在。2 番目の姉は、楽しそうでうらやましい。大学生になってやっと、自分なりの価値や生活スタイルに自信が持てた。2 人の姉は、どちらも尊敬できる点がある。
- (2) 姉（7 歳上）と妹（本人） 妹が、勉強などで評価されていた。仲がよくなりはじめたのは、お互いを認めだした高 3 頃。姉は社会人で習い事をはじめた。それからは妹のことをよくほめてくれる。妹は、姉の習い事のうち一つをやりたいが、また比較が起こるため習いに行くのをあきらめている。姉との関係は、それまで妹にとって大問題だった。
- (3) 兄（3 歳上）と妹（本人） 高校ぐらいから互いの生活時間が違い、比べられることもあまりない。特に何かを気にして関係を調整することもなくなった。
- (4) 姉（本人）と弟（3 歳下） 現在、英語力に優れ理系の弟、文系の姉。姉は、弟を誇りに思い、競争心が消えたことが不思議。



こうした事例は、高校や大学ぐらいになると、生活時間や方向性（関与度）が違ってくるため、比較対象としての側面は薄れてくることを示している。また、そのことによって、きょうだい互いを認めることができるようになっていく。

逆に、現在でも兄弟関係がよくないあるいは微妙であるとの記述もわずかながら（1.5%）見られた。

#### 事例

- (1) 姉（大学4年）、妹（本人）、弟（18歳）、妹（16歳）、妹（9歳） 円満なきょうだい関係を築くのは大変。自分より年齢の低いきょうだいに負けたくないプライドあり。負けると悔しくて機嫌が悪くなる。きょうだいが多いとライバルとなる。すべて競争という感じ。

### 8. きょうだい関係の維持・調整について

自己評価維持とは異なる形で、きょうだいの関係を維持しようとする傾向も見られる。

#### 事例

- (1) 兄（3歳上）と妹（本人） 勉学面で、妹への評価が高い。そして兄の関与度の高い領域において、妹は自分の遂行を低くしている気がする。また、生活面で、妹は自分の不十分さを強調している。
- (2) 姉（本人）と弟（2歳下） 弟は姉に劣等感を持ち、自己を卑下して低めに評価する事が多かった。姉はこれに気づいてから、弟を積極的に評価するようになった。

### 総合考察

#### きょうだい関係におけるライバル心、葛藤と軋轢

きょうだい間の関係は、親密さを基本としているが、互いに心理的に近い存在であるがゆえの葛藤や軋轢をも内包している。そうした葛藤や軋轢、ライバル心は、互いに関与度が高いことがらで生じやすく、きょうだいの組み合わせ（兄弟、姉妹、兄妹、姉弟）のいかんにかかわらず見られている。ただし、SEMモデル（Tesser, 1984, 1988）の示唆するように、概して、きょうだい間の年齢が近かったり、同性きょうだいの場合に相対的に多く見られる。

その一方で、きょうだい間で、それほどの葛藤や軋轢を感じなかったとする回答も見られた。これは、異性きょうだいであることやきょうだいの年齢が離れていたこと、さらには互いの志向性（関与度）があらかじめ異なっていたことなどが、その大きな要因となっていたと考えられる。つまり、きょうだい相互に、自己評価維持を阻害するような状況をなせば無意識的に回避し、暗黙の調整がなされていたと推測される。

また、3人きょうだいの場合、そのうちの2人、特に同性や年齢の相対的に近いきょうだい間で、ライバル感情や葛藤が生じがちである。そして、他の1人とはそれほど強い葛藤は起こらない。ここに、3人きょうだい全体としてバランスが成り立つようなダイナミクスがあることが示唆される。

#### きょうだい間葛藤の解消

きょうだい間の葛藤や軋轢をどう解消するかは、個人の社会化にとっても重要な意味を持つとともに、そこには、時間の経過、きょうだい相互の心理的成長などが関わる。

ここでは、自己評価維持の方略として、関与度、心理的近さ、達成レベルの3つを変えることで、きょうだい関係の修復や改善がなされたことが具体的に示されている。特に、関与度の調整は多く用いられており、有効に作用している。関与度は、勉強からスポーツや趣味などのように、まったく異なる分野へ変わる場合もあれば、クラシック・ピアノからジャズ・ピアノへ変わるなど下位領域に変わる場合もある。そして、関与度を変えた結果、きょうだいの遂行を以前よりも誇らしいものと感じられるようになったという事例もある。これは、反映過程が生じやすくなったと考えることができる。こうした相互の自己評価が維持されるような変化は、Beach & Tesser (1995) の拡張SEMモデルに合致している。

磯崎・高橋 (1993) では、友人関係の研究において、関与度や心理的近さ、達成レベルを組み合わせることで変化させる場合が多いことが報告されている。しかし、今回の場合、こうした複数要因の組み合わせの事例は少ない。これは、自己評価維持が、必ずしもはっきりと意識されずに進行することが関連して

いると思われる。

さらには、関与度を調整するだけでなく、きょうだいのよいところを積極的に評価していこうとする側面も見られる。音楽が得意な妹は、対人関係の面では、姉の方が優れていると好意的に評価するなどがそれに当たる。これは、妹にとっての自己評価維持だけでなく、姉妹関係の維持をも志向したものと考えられる。結果に示した8の(1)、(2)の事例にも見られるように、単に自己評価が維持されるだけでなく、きょうだいの自己評価維持へ向けて行動や発言の調整を行おうとしている。これは、自分自身の自己評価が維持されていても、きょうだいの自己評価が維持されなければ、ある種の不協和 (Festinger, 1957) が生起し居心地が悪いものと感じられるためと推測される。

興味深いのは、そうしたきょうだいの好意的な評価を、必ずしも他のきょうだいも納得し、肯定しているとは限らないことである。この場合、妹の好意的な評価や発言に対し、姉は逆に、妹の方が親しい友達が多いと見ているのである。また、結果で取り上げた事例以外にも、双子の兄弟で、即興のピアノ演奏に優れる兄が、それがために自己評価を低下させている弟のピアノ演奏を好意的に評価するという事例がある。しかし、弟は、それをみせかけの「同情」であるとして不愉快に感じている。その意味で、きょうだいへの気遣いがあることは推測されるが、それが、ほんとうに相互の自己評価維持を目指した働きかけとなっているかどうかは明らかではない。

### 親の働きかけときょうだい関係

きょうだい関係には、親や周囲の働きかけも重要になる。例えば、姉(本人)と弟(3歳下)で、姉が習い事を始めた年齢に弟が達しても、姉の上達具合が遅いため、弟はさらに1年遅れて始めたという事例がある。これは、きょうだい間で競争が激しくなることを避ける狙いがあったと思われる。それによって、姉は、自己評価が保たれたという。

また、結果に示した5の(3)の事例のように、3人きょうだいで、親やきょうだい自らが、受験する学校を変え、きょうだい間の接点をずらした例もある。同じ学校では比較が際だち、関係の悪化が懸念

されるため、それを避けたと推測される。

逆に、結果の6であげたいいくつかの事例から見られるように、親が、特定の子ども(例えば、男の子)を偏愛したり、きょうだいを比較することが多くなると、きょうだい間の嫉妬や葛藤が増大するおそれがある。

### 自己評価維持と関係性の維持

きょうだい間で、たとえ関与度が高いことがらであっても、必ずしも自己評価を阻害されるとは限らない場合もある。例えば、趣味の上では、きょうだいと関与度が一致し、きょうだいの方が優れていても、なんらかまわらないといった記述も見られる。つまり、SEMモデルの考えとは相いれない。これは、関与度が高いことがらにおいて、きょうだいが自己より優れていても、必ずしも自己評価を損なうわけではないことを示している。むしろ、関与度が高くても反映過程が生起する可能性があることを示唆している。そこには、自己評価維持とともに、自己と他者(この場合きょうだい)双方にとって好ましい状態を保ち、他者との関係を維持したいとする関係性維持の心理(磯崎, 2002)が作用しているようにも思われる。この点は、今後の課題でもある。

きょうだいの場合、ある程度の年齢になると、それぞれの生活パターンや関与度にも違いが出てくる。また、接触度が低下したり、達成結果が以前ほど明示的ではなくなる。こうしたことが、きょうだい間で、より親密さを維持しようとする心理機制を醸成するのかもしれない。

また、成長するにつれ、きょうだいは互いに相手がある特定の側面から見るのではなく、多様な見方ができるようになる。このことも、きょうだい間の葛藤や軋轢を低下させる一因であると思われる。本研究の事例で見られた大学生(およびその前後)という時期は、そうした社会的な成長の時期でもある。

これらが相まって、大学生のきょうだい関係は、それ以前に比べ、より葛藤の少ない安定したものになるように思われる。

## 引用文献

- Beach, S. R. H., & Tesser, A. 1995 Self-esteem and the extended self-evaluation maintenance model: The self in social context. In M. H. Kernis(Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum Press. pp.145-170.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Festinger, L. 1957 *A theory of cognitive dissonance*. Stanford: Stanford University Press. (末永俊郎監訳 1965 認知的不協和の理論 誠信書房)
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. (大橋正夫訳 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- 磯崎三喜年 1998 社会的比較と自己評価の維持 安藤清志・押見輝男(編) 自己の社会心理 誠信書房 pp. 97-116.
- 磯崎三喜年 2002 「心の教育」再考 一個と関係性の視点から— キリスト教文化学会年報, 48, 1-11.
- 磯崎三喜年・高橋 超 1993 友人選択と学業成績の時系列的変化にみられる自己評価維持機制 心理学研究, 63, 371-378.
- 塩田芳久・大橋正夫 1958 同胞関係の心理学的研究(1) 名古屋大学教育学部紀要, 4, 101-107.
- Tesser, A. 1980 Self-esteem maintenance in family dynamics. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 77-91.
- Tesser, A. 1984 Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and development. In J. C. Masters & K.Yarkin-Levin(Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology*. New York: Academic Press. pp. 271-299.
- Tesser, A. 1988 Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L.Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 21, New York: Academic Press. pp. 181-227.